

# 書筋座富

特 54

20

富座書筋



第一番目 桶狭間鳴海軍談

○清洲城内の場同能舞臺の場○南岩寺松原捕物の場○今川本陣拷問の場、大詰今川家假家の場、同返桶狭間義元討死の場

- |     |       |
|-----|-------|
| 織田家 | 尾上菊五郎 |
| 茶道  | 同     |
| 岡崎  | 同     |
| 織田  | 同     |
| 今川  | 同     |
| 松浦  | 同     |
| 水尾  | 同     |
| 櫻川  | 同     |
| 前田  | 同     |
| 三浦  | 同     |
| 男達  | 同     |
| 織田  | 同     |
| 長兵衛 | 同     |
| 織田  | 同     |
| 黒鷲  | 同     |
| 今川  | 同     |
| 木下  | 同     |
| 織田  | 同     |
| 蜂取  | 同     |

織田の侍女立田 中村のはる  
今川の侍女花町 同  
伊勢清の女木 同  
今川の母おさき 同  
幸内妻おさき 同  
幸元四郎兵衛 同  
近藤野守之助 同  
義元之助 同  
大助六由 同  
切腹 同  
朝現仙平 同  
白酒屋新兵衛 同  
三浦屋愛染 同  
男達 同  
同 同  
三浦屋胡蝶 同  
曾我新左衛門 同  
鬼王新左衛門 同  
三浦屋和歌浦 同  
三浦屋白玉 同  
茶屋意久 同  
福山善吉 同  
通人明石 同  
三浦屋浮橋 同  
三浦屋門兵衛 同  
三浦屋揚巻 同  
花川戸助六 同

第二番目 極附幡隨長兵衛

○今川橋黒鷲殺しの場○越前水尾屋敷の場○櫻川腹切の場○花川戸幡隨内の場○水尾屋舖酒宴の場○同湯殿の場

第一番目 桶狭間鳴海軍談

○三立目「清洲城中の場」本ふたい幕張八幡宮の挑灯下手  
は城中通行相ゆるしゆと書し高札都て祭禮の摸擬愛ふ今  
川の臣由良大八百姓のこしらへて是を林左太郎近臣足  
輕六尺棒を持立懸(由良大八)コリヤ何とあされ升(近臣)  
汝が振舞伺ふところ此城内を幾度とさく通行いたす正  
く敵の廻しもの(足輕)それゆる詮義を致すのだ(大)思ひ  
もよらぬお疑ひ私しに近在の百姓結構あ浮城内それゆる  
拜見致し升る胡亂おものでりムり升ぬと詫る(敵近臣)い  
りさや田舎の其方ゆゑゆるし遣りすといふを(林)イヤイ  
ヤ今亂世の中かれバ此場よ於て某が詮義致さう(敵)こ  
れ土民汝誠の間者かれバ白狀致せ(林)シテ其方いつく  
の生れじや(大)私しに當國有松のものをムり升る(林)彌  
々以て詮義及どいふを(敵)ハ刀お懸ても詮義いさせぬ  
ト兩人言争そふ向ふより我君のお入りと呼ぶ(兩人)下手  
よ扣へる向ふ小田春永跡より香取小平太刀を持此跡奥

方圓生(女形三人)腰元茶道祐甫近習四人付添出て舞臺へ

來りり(春)今日城中よ於て八幡は祭禮貴賤おしあへ参詣  
詣あすい又一興(興)我君の仰せの如くよいあぐさみをし  
升たト皆くせりふある(足輕)シテ最前の土民はト大八を  
前へ突出す(春)最前手も心付きし怪しク何者じや(敵)あ  
れハ八幡宮へ参詣の者トいふを(林)イヤイヤノ者こそ  
怪しきものもる留置き升てムり升る某し得と見受し所一  
癖あるべきものイデ詮義仕つらんと(大)うろんな者で  
ハあ有松の紋り職人とうぞおゆるし下さり升せト詫る  
(興)その職よ致してハ手先が藍よ(大)エト胸りこきし有  
て(皆)イデ引懸つて詮義あさんト立懸るを留(春)イヤ  
詮義及バぬ免し遣りせ(敵)早く此場をト目ませで立ど  
いふ(大)イヤとんだとて手間とつたと下手へはひる(皆  
々)最早お能の時刻なれば(春)チ、参るであらふト立上  
るこの時向ふよてアイヤ暫らくお待くだされト山口九郎  
次郎出て來り是より(春)ハ噂を聞バ今川氏元上洛おとよ

し察する處北條と和睦なし武田との義を結び縁者とされ  
誰あつて隣國を支へる者なしとの上洛あらん(山口)仰  
の如く嶺區をあれと氏元京都まで登る途中一國一城の  
領主ゆればたやすくの發向あるまじト(小平太)夫に付き  
て氏元の常家を始め近江の佐々木美濃の齋藤打亡して登  
ると聞く左ある時ふり一戦お及ぶべしト此筋皆くへ渡  
りト春始め山口の和睦を結んで無事を計るトいふを  
小平太)取小足ざる今川を亡すこと我手裏ありト(近習)  
出て最早お能の時刻と告げる(春)待兼た直さま立越氣變  
を晴さんトせりふ皆くへ渡り春永奥方敵役皆くへ付て上  
手へはひる跡山口残る爰へ下手よりいせんの大八伺ひ出  
て(大)貴殿お何故有て我主君氏元公へ隨身召るお(山  
口)我主君此下東吉を用ひ古參のわれのゐるに甲斐なし  
それゆゑ今川家へ心をよせ上洛の砌功をたて永く臣下  
に仕へる所存(大)侈尤もある仰せ申テ人質代り又送ると  
ある主人の望みの其品の盗み出さず手はずト此時敵役寶

劍を持出て(敵)仰せつけられし彼一品參致したト山口へ  
渡す(山口)オ、出うしたト寶劍を改めイヤ氏元公へ(大)  
儲りお受取やしたト大八抜かける是まで蛙鳴くや、俄く  
蛙の鳴立る(山口)夫ぞ則ち刃の奇特(大)扱ふしぎ  
あト是方山口の懐ろ方一封を出し(山口)此書狀劍もろ  
共氏元公へ(大)心得ましたト大八向へはひる爰へいせん  
の茶道祐甫出(山口)そちふたのみ置きたる腰元よし野の  
返事(茶)夫の色よい返事致さぬ管りねてよし野のお小  
姓の左枝大春代と言替してをり升る(山口)大春代ト無  
念のこみしド、(茶)艶書を出し(今)最前樂屋で拾し一通  
是が儲な不義の證據ト出(山口)ト、犬清様參よしの方  
ト、是ぞ彼等よ一泡ふりせるよい證據ト此筋をよろしく  
言合せド、(敵)彼お取辱を(山口)アコレ密よくと山口  
文を見てこかし此摸樣よろしく幕  
○同奥殿能舞臺の場ふたいの道具の都て石橋本行の飾り  
付けらしる断子方扣へ下手揚幕より腰元よしの同滝田兩

人ども僧の拵らへみて出て來たり上手へ住ひ諸曲もあり  
同じく揚幕より左枝犬清石橋お出て是より本文の諸ひ  
詞皆くへ渡りド、よろしく振ある能程は捕手を遣ひ  
宜敷石橋赤頭をよるとある爰へいせんの山口出て犬清よ  
しの不義の兩人繩懸る覺期いたせト爰へいせんの春永園  
生小平太こし元付て出て(春)何ゆゑ犬清は繩懸るぞ兩人  
君の御目を掠め密通いたせし故仰せも待す成敗いたせし  
も君のお爲(春)山口彼等が不義の證據を見せよ(山口)以  
前の文を出し犬清さま參る芳野ト是よて(大)のゝる證  
據の出る上り君の勝手は懸り何卒お仕置なされて下さり  
ませト愁ひの仕打(山口)死を争さうも今い無益此上ハ追  
ての成敗イヤ犬清よしのを引立よト云を留今日ハ八幡の  
祭禮生るを放す放生會彼等二人ハ勘當あるぞ(大)重く  
厚きお情不義のや譯お(兩人)さうぢやト自殺をしやうと  
する此時向ふ方此下東吉出て(東)ヤレ兩人死ぬるお及ば  
ぬ今某しも我君の傍情深さを承まひりしが犬清の傍愛臣

まつた芳野の傍愛様の傍秘藏され死ぬるに及ばぬ傍勤  
當を幸ひよ早く此場をト兩人術なきこかし  
三立目「奥殿能舞臺の場」(木下)能折成バ山口氏も伺ひ升  
るが今度今川上洛の折せひ一戦よ及ハ必定期時貴殿よ  
先陣とささるゝ成ん(山口)如何ハ一命は掛先手を勤めて  
防戦成ん(木下)誠よ夫ぞ勇しくト響る爰へ以前の林佐太  
郎服盛を持出て(林)我君の下のされ物有難く頂戴致され  
よ(山口)ハ、ト平伏する三寶へ刀短を乗持出て(小)我君  
の傍賜物(山口)ドレ拜見ト件の服盛の錦紗を取中を見  
此中よ白小袖水上下有故胸してヤ、拙者へ是を被下しハ  
(春)不義を見出しとちへ恩賞(木下)格別の恩召を以て切  
腹仰付らるゝ(山口)スリヤ拙者よ何科有て(木下)夫成腹  
切刀を拜見召れ(山口)や、此短刀(木下)小田家の重寶  
蛙丸(山口)扱は是故ト仕打(木下)斯る證據の有上り汝が  
包む懸事の一々白狀致せ(山口)何白狀とハ(春)ヤア愚や  
山口汝兼て今川へ心を寄るハ東吉が断にて得方知(小)

此上の覺期なし此場は於て(昔)伏罪致せし是にて(山口)ヤア懸証據と言ふ共此身も取て覺無(木下)ヤア飽迄根強其一言巧の段々聞せんト是が今川の問者を招き城内と見せしと又彼が家臣大八は蛙丸を渡せしを奪返し又密書を取付たりヤア(佐太郎其者を是へ引立よ(林)ハ、ト以前の太八を引立出る(山口)ヤアとちり大八(大)金輪ならく言まいと思しが(山口)證據の密書又短刀を悉上られ最叶ぬ故私に口より白状した斯露頭の上うらりト刀を抜て木下は懸是を扇よてあしらしひ、山口の腹へ突立無念の仕打よて苦む(春)頓て勝閑(木下)お家の榮ト刀を振上天命思知つたるウト(春)の蛙丸を押戴き仕打皆く引ばりの見ぬ此模様宜く幕

○四立目岡崎南岩寺松原之場海道松並木の道具こゝに今川家の臣島村丹下道筋見分として来る道よて小田の浪士郡幸内の悴幸松丹下に無禮をきたる迎引すへ来るを幸内妻おみき庄屋太次右衛門同村の百姓と共に院をかし漸々

勘辨なし岡崎宿へ赴く跡おみき幸松の村長初百姓等お禮を言庄屋の今日今川上洛の通行故早く歸宅すべしと諭して先の道路偵見お行かみつ一子を伴ひ戻らんとせし時一子が持たる産神岡崎八幡を受たる松の面の扇面の親骨放れ不吉に思ひ夫の身の上お凶事なき様心掛りお思ひ急ぎ歸る此折吉田の方今川義元供先行烈にて松明をともし來りし折何者の仕業ありけん大將義元の乗物へ鐵炮を打掛たるを供の者驚き乗物の内を伺ふよ浮安全あるよ一統案堵を折りたわらの松影お伺ひ居たる忍びの浪士の小田信長の臣下たりしが山口九郎次郎の説言よ依りて浪士の身とありし毛利新左衛門の二子同苗幸内よて短筒を擔様子を聞き扱ひ打もらせしと心中お怒りを生じ今一發打んとまたる所へ今川の郎等見認怪敷者と取つて懸ると幸内事どもせず拂のけ退れんとして振つくやりつ松並木の間を走る是を八方お取押へんとして郎等折重あり捕取んとせしよ幸内手練の術おてはね返す此はづみ

我着せし衣服の片袖ともがれ其儘宵は紛れ雲を霞と逸失る件おて幕

五立目岡崎本陣拷問の場高二重家臺軒へ今川の定紋付の幕を張り今川氏基本陣と云高札杯宜く爰よ今川の家臣十手を持扣へて(家臣)はや葛山彈右衛門殿より浮出席あらん夫お付ても一昨日丸山繩手おて君を目掛鐵砲を打掛し狼籍者證據よのこる片袖お探索せしお其曲者の小田家の浪人郡幸内と云者妻子迄も召捕て詮議を致せど今よ白状致さぬ今日こそお妻子よお見るまへよて手強い拷問ト此筋兩人おて宜しくある爰へ葛山彈右衛門出て來り然らバ浪人幸内めをこれへ呼出され(家臣)ハット是へ召連れられよト呼向ふよて(足輕)おしこまつてムり升るト向ふ方幸内足輕四人繩を取て出て來り舞臺能所へ引据る(足)仰よ任せ幸内を召連升たト上るりよなる(彈)小田家の浪人郡幸内其方一昨十五日主人氏基公岡崎本陣へ夜に入ての傍着の途中南岩寺の松原おて主人を自掛お乗物へ再度

逸鐵砲を打掛し曲者は迄吟味致すよさせ白狀致さぬ(幸)お尋おれと會て覺へおければ白狀のいたさぬ(彈)イヤ存せぬといはさぬ其砌近傍を尋ねしお南岩寺の林お忍び出たる故袖おらみおて引留しはづみよ片袖をきつて逸げゆき終よ見失おひしが跡お残りし片袖の劔花菱の紋所汝が衣服お寸分ちがぬぬ通れぬところよ白狀しろ(幸)イヤくそれの鎌倉よて古着で求めし品同紋所る故斯お疑ひのござれお劔花菱の世間よ間々ある紋所外をお詮議成され(彈)斯證據有ても知ぬとヤクト是よて(家臣)兩人も其夜のとを云白狀致せトいふ思入有て(幸)何が度お尋ね有とも氏基公を狙ひし杯との覺えのムらぬ(彈)イヤ其方の陳じてお妻おみを拷問懸しところ流石女の苦痛よ堪す氏基公を鐵炮で打んとせしお我夫と白狀せり是でも汝の知ぬとヤリ(幸)察する處女のお身故拷問よこらへがたく血迷よて白狀せしおらん此幸内の一お知ぬ(彈)まふとい幸内此上の身おひしひでも白狀さすが夫でもいはぬの

(幸)石を積れ膝の碎けても覺へる事と白狀のいたされぬトいふは是より妻子より出で事ありて上るりあり向ふ幸内の妻おさみ同一子幸松兩人とも細付拷問は勞れたる仕打是を(相中)の家來付を以て來り(家)仰は任せ妻子の者引出升てムリ升るト(妻)ヤ幸内殿(松)と様逢たりつたわいのムトすがらふとざるを細取へたてるを(妻)ア、コレ何願はあゝその子を手荒いとして下さり升(四)チ、坊もまばられたり、わいや〜ト歎仕打ドヤ(松)私しや父様の傍へ行たい〜ト是を聞(幸内)(さみ)宜しく胸の切あき仕打有て(妻)幸内殿思ひ疑うけさのふの手強い拷問さぞ勞れたでムんせうあ(幸)責よあふの覺期のまへ夫は汝の何で白狀いたせしぞ見下果たるうつけ者ト是を聞心得ぬ思入よて(妻)エ白狀せしどの(幸)われ程中聞せしお苦痛堪かね鐵炮おて狙しめ夫ありといひたる(妻)イエ〜夫は偽り事而して夫は誰が斬し(幸)彈右衛門殿が今の斬し(妻)イエ〜それの覺あし夫

ぞ私が白狀したといつたらお前も言ふりと是ヤ一ツの計略ト(幸)武士は似氣なき嘘偽り此上の愈々以て覺り無きつといふ(彈)飽まで根強きあんぢら夫婦此上の拷問の手並を見せんと上るり有て家來皆くみて(幸)を傍らの柱へ括揚兩人棒よて左右ふつ妻の夫をうりべい寄ふとするをドヤ六尺棒よてへだて(家來)左右宜しく責る(幸)苦痛を堪へる仕打ドヤ(妻)打で叶ぬとあらば夫の代は此おさみをト彈へそぐるを手荒く引のける(幸)仕打有て是ヤ〜女房何れもいふな斯手ひとき拷問は打殺されて死するが本望まことの武士の命の惜ぬと覺期の仕打(彈)さのふも此如く石を抱りせ拷問爲といつる言ぬ幸内これ女房の其方成代り罪を透一ヤ上よサアトやんらうよいふ(妻)サア知たところさのふもこん強いの拷問を受ぬ前かヤ升が(彈)夫ヤ打殺されても(妻)死でも是のいはれ升ね(彈)そふいやいつとト是を妻子を引据させ棒よて折檻する幸内愁ひのこかしドヤ是れを見て寧白狀しやうの

といふ仕打種々有てドヤ妻の氣絶する(幸)是かさみ氣を備にしる覺あきとといひ〜と斯る責苦も逢ながら能も白狀いたさぬぞ夫でこそ武士の妻(妻)チ、其一言が冥途へ土産早ふ死とムリ升る(彈)イエ、やめつたふの殺さぬぞ(松)是やお役人様母様いあんべいご悪故どうぞ免て下されト母をうり(彈)チ、父母をのばり手前も苦痛をさせて呉んト子役を打据る(幸)ヤア何辨へさき悴を責るの卑怯未練成ぞ(彈)エ、親の因果が子に報見トめさきと見物しる是でもう〜トまた子役を折檻する(幸)ア、頭是かい悴を(妻)其様は打れて(彈)命を助はしひから白狀する(幸)サア夫の(彈)たゞしい愛で打殺さふ(幸)サア兩人サア〜トくり上りありドヤ(彈)殺さうとする此時與あて(正)アイヤ拷問暫くお扣へなされ(彈)何とト與あ(正)岡崎五郎三郎正行出て來る(彈)ヤ貴殿の岡崎氏(正)鳴海表へ主命よて出張せしが只今歸着ト此内(幸松)の(行)を見て(松)やお役人様と、様やう

様をどうぞ助てト拜む思入(正)チ、幸内が悴幸松氣遣ひ致すお助遣すぞト仕打有て(正)葛山氏シテ白狀致升たり此時彈右衛門主人を狙ひし大罪人拷問致ても未罪お伏せぬ正行然らば拙者が吟味ささんト(正行)(彈右)お休息致せト言(彈右)然らば休息致そふト彈右與へはいる跡(正)ヤア〜養仙老何れにゐる早參れト與あ醫者出て來る(正)其者夫婦氣つけを與へよ(醫)ハツト皆々幸内の小手をゆるし(醫)の藥を與へる(幸内)死する覺期(醫)テハムらふが岡崎殿の寸志ゆる(幸)ソリヤ岡崎氏とさハツ頂戴致さんト(幸)藥をのむ(幸松)とよさ水を上やう(醫)オ、賢いト子役手桶の水を、幸(吞せる(醫)手強い拷問故内義の勞たらうぢやが未脈体が儘でムれバ確のりとあされ妻おさみ有勢ふムリ升る(正)スリヤ脈体は別條ハムらぬト醫者與へはいる跡(正)是や幸内ハツ(正)汝の素より妻子の勞し苦痛の程察入る(幸)添けさき珍仁情謝とべさ道もムらぬ(正)イヤ〜禮より及ばぬ是や幸内能承ま

れト是(正)斯拷問を遂るも主君氏基公を鐵砲めて狙し  
 大罪今白状及びなバ此正行が身よのへて妻子が命の助  
 得させんと(幸)理非明白ある正行殿の説得脊とち割れ  
 石をつまる、拷問より苦き仰せ去ながら元々覺なき事白  
 状おしぐたし(正)スリヤど迄も白状致さず妻子が一命  
 見殺しよ致ても(幸)不便とい思へども責殺されて死する  
 も因果と覺期致升る(正)本意とげぬを無念と思ひ責殺さ  
 れても白状の致さぬと覺期の敵なからも天晴あれと是方  
 (正)の種々説得の臺詞生先長い幸松を助かろバ成人の後  
 郡の家名をつぎ武士とならんよ少も思ひぬの親たるもの  
 と不覺期(幸)サアこれの(正)但の無慈悲おせめ殺さすか  
 (幸)サア(兩人)サアくく是(幸)おさみと顔見合  
 じゆつちき思入(幸)すつと立下手の高札を見て坪の竹を  
 ぬき今川氏基と記せし氏基といふ名の處へ竹を貫ぬきお  
 つたりと思入あり(正)是を見てムウ扱ひ今川殿を討取ん  
 と思たつたる念も晴しの(幸)是よて拙者名義もたち今



何をか包すさん當國南岩寺の松原よて(正)主君を狙し  
 (幸)斯云郡幸内あり(正)通れある義心返の感心是より  
 (幸)某しい小田家の臣郡新左衛門が悴なりしが佞人山口  
 九郎次郎がためお君の勘氣をうけ終お浪人何とぞして山  
 口を付狙しが山口今川家へ内通せしを此下東吉郎お見わ  
 らのされ終よ誅せられ愈々無念と三州矢はぎの詫住居一  
 ツの功を立んと思ふ折柄小田家の爲お大敵たる氏基殿岡  
 崎泊りと聞し故討んとせしも運つたおく打損つわれの元  
 が妻子まで斯捕りれて數度の拷問いふまいと覺期せしガ  
 貴殿の情けお隠し兼此上の刑罪お行はるゝ覺期(おさみ)  
 夫が白状致せし上の同罪よ(幸松)父様や母様お死ぬるお  
 ら坊も一所お殺してト云を(幸)の留今岡崎殿が詞の如く  
 今其方等が生書おさバ家の斷絶ト死を止めるトおさみ  
 一一所お死おたいといふ(幸)得心なくバ夫婦の縁も是限  
 り悴と共よ離別するぞ(おさみ)泣おとすト死を止れど  
 (幸)只此上の妻子が一命(正)氣遣おるお(幸)夫よて

思置事おし片時も早く淨刑罪よト爰へ與方以前の(彈右)  
 手鎗を以て出て白状おす上りらのイテ鎗玉よトいふを留  
 め(正)サア卒亦なり譬へ罪人おればとて法例あり(彈)イ  
 ヤ其刑罪の田樂ざしト(幸)へ突て掛る(幸)竹おて鎗を打  
 落す(彈)刀をぬりふとするを(正)留て自まの成敗おへ  
 てムれ(彈)無念のこおし此内(幸)の件の鎗を取て腹へ突  
 (おさみ)悴(夫に)自殺ありしかト鍵付(幸)南岩寺の松原  
 よて氏基殿を討んとせしを白状なせし上りらの武士の情  
 又岡崎殿切腹お死下されい(正)オ、今川家の印おる其手  
 鎗よて死する上の此方よて刑罪なすも同事はおて見届し  
 ぞ(幸)忝おい(おさみ)此上の夫と共よト坪竹おて自害を  
 しやうとする爰へ以前の醫者養仙出て留是夫の意見も聞  
 入ぬの却て不貞ぢや(おさみ)ソリヤ死るにも死おれぬ  
 (正)能お留めし幸内白状なす上の妻子の助命お抱なして  
 連行やれ(醫)長まつてムり升る(彈)イ、ヤ大罪人の子  
 されバ其助命の(正)アイヤ母殿の副使の入るお差圖早

く此場を(さみ)といへ此儘(幸)ヤア此期も及んで未練  
至極ト鎧を引廻す(彈)思へば立上る(正)切腹借と見届し  
ぞ(幸)ム、ト點頭上る(一)さよき最期ぞト三重にて宜く幕  
○大詰今川家本陣の場本ふたい高二重向ふ金地の襖都  
て本陣の道具爰(相中)四人諸士陣立よて扣(居る(四  
人)是迄數度の戦ひおまのぎをけつた事の靈詞渡るド  
ンチャンの鳴物よて庵原春太郎陣立の粧にて駈出て(春)  
注進(皆々)我君(ヤ)上んといふ時奥方今川氏基知  
せお及ぬ夫へ参らんト氏基大の拵へにて跡より朝ぎり  
出て(氏)オ、注進待兼たシテ戦ひの様子(春)ハット是  
か味方勝利小疑ひなしト(氏)悦び高の知たる小田の小勢  
天下を握る君の勢威勢大慶至極ト皆々歡び(春)再び戰場  
へ廻らん(氏)春)引返してはひる跡(氏)小田春永を亡せ  
バ跡の齋藤佐々木此等(取)足す天下を握る(瞬)間是  
か酒宴を催さんト是あて奥方腰元(女形)四人銚子盃を持  
出て靈詞有て酒盛をする此内下座あて小唄をうたふ(氏)

聞耳たて(氏)アノ唄のたれぢや(朝)何唄をうたふと注進  
わそバす(氏)そちの知らぬ予の幾度クアノ唄をさく  
ト皆さつぱりせん唄の聞え升ぬ(氏)ハチ子計りの耳  
み入とい怪有な事ぢやト是あて諸士の何ものあるか探ね  
見んト傍を探しドト出て(諸士)心當を尋ねしが更人  
影のあし(氏)ヤア天地の間は骨有て形あさのあしト勝  
利の酒宴サ、つげト盃を取上る此時向ふてアイヤ  
注進(五郎)正行止めやたト向ふ方正行袴大小小手脚當  
て出て来る(氏)何故酒宴を止し(正)それを君の大事故  
(氏)何とト是方正行の君より生得大酒よて斯る勝利の酒  
宴をバお止めやすの不敬乍ら春長と今戦争のまつ最中臣  
下の者の命を輕んト戰場よて戦ふ君よの女義を相手小  
注進(酒宴有て)臣下が苦心を思召ぬお似たりトよろしく諫  
める(氏)ヤア正行汝が諫言する事あから今小田の皆三カ  
所まで落したりとの注進味方の勝利うたがひなけれバ開

きたる此酒宴けつして遊興あらず(正)イヤ、小田の小  
勢ながら臣下よ此下東吉といふ楠も勝りし智者ありた  
どへ一時の勝を得たとて油断あるべきやトいさめる氏基  
ひつとしてヤア奇怪ある其一言小田よ東吉ありともうれ  
は増りし味方わの勇士あり此氏基を愚將ありといはぬ計  
りの過言あり(正)全く君をさみあすあわらずお家の大事  
を思へば参りト朝ぎり種々執成氏基の一日口外致せし事  
の實のされバ置ぬ氏基諫言だてする正行引立よト諸士四  
人立懸つて君の上意立めされトいふ(正)めつたふ愛り立  
ぶたし注進先祖父代臣下よ屬と家柄君の注進瑾有時何  
度もお諫すこそ臣下の道制争半途よ此酒宴宜ぬ事とお諫  
すも注進油断無やう願ト云ド、氏基高の知たる小田の小勢  
憎き正行(正)譬へお手討あればとて何で此場の退き升  
ぬ(氏)汝が詞の予も用ぬ奥へ参て酒宴を爲ん(正)どう有  
ても(氏)聞耳持ぬぞ主お逆ふ不忠者めト氏基女付添奥へ  
這入跡正行此度の注進も某し遮てお諫すせお用な

く殊よ此頃誰が唄ともトもくしく楠、鳴海の果どわ  
われありとうたふ唱歌の味方あつて不吉の文句まつた  
小田の派士郡幸内竹をもつて關札の注進を貫きしのもし  
もの事の前表と案事る此時奥よて今様の始りと呼ぶ(正)  
扱ひ君よの朝霧とのがいさめもさしたまはず猶も注進  
よ耽り給か此上の奥へ参て尙もお諫すさんト立上る此時  
向よて貝鐘の音聞ゆる(正)俄又聞る貝鐘こそ正しく敵の裏  
手へ廻り不意よ本陣をおそふあらんト此内今様の鳴物聞  
え君へた諫も入たし又敵の防ぎも肝要ありトの思入持口  
の回をおさんト向ふへはひる跡床の上るりになり向ふ方  
蓋久保權阿彌坊主のつら鑑下よて出て來り(あし久保)我  
君へ注進トト是あて奥方以前の氏基朝霧腰元四人付  
て出て(氏)おんぢい同朋の權阿彌最前勝利と注進せしガ  
様子(あし)然バ敵の砦を落し充分の勝利ありしがト是  
かあし久保物語様宜く味方の負色是非あさしたいた注  
進する氏基是を聞(氏)僅の小田の小勢に切まくられし言

がひきき味方の奴ばら是と云も猿冠者お計れしの口惜や  
此上の自身は出馬なし敵あ一ト泡ふりして呉んと三寶を  
ふみくだき無念の仕打(朝)斯計客有事と正行殿の知たる  
か最前のお諫只此上の大高へ本陣を引揚給へ(氏)數度の  
戦ひ小敵も後ろを見せざる氏基なんぞ此儘お引揚んや  
あし久保(氏)傍錠のさる事乍涉木陣の發圓の儘おられ今鳴  
海の松原まで小田の勢をくひ止升れと爰が破るべ必ず爰  
へ押寄来らん涉油斷有なと是を朝ぎりあし久保出馬を諫  
る氏基くどいと聞ぬ是よて朝ぎり支度長刀をとり(朝)妾  
と一所(女形)ハ、アト行ふとする(氏)朝霧何へ行(朝)  
君の危く存じ升れば女乍も敵を防ん(あし久保)通れある  
涉覺期權阿彌も朝霧様のお供を致さん(朝)我君様(昔々)  
あさらバト朝ぎり別を惜み朝ぎりあし久保こし元付て向  
ふへはひる跡に(氏)數代つらきし今川氏基斯波が巨下の  
春永や猿冠者が匹夫の爲に送を取しの殘念しどくイデひ  
と白眼も致吳んと屹度ある爰へ上下(相中)六人軍卒お

て鎧を持伺出て(六人)氏基覺期ト突て掛を是を相手よ立  
廻りドリ六人の海老折あり道具廻る  
○桶狭間山間の塙本舞臺後一面の岩組所々に松の立木ド  
ンチヤンの鳴物床の上る有り爰へ大勢の鎧武者得物を  
持て出る跡方前幕の左枝犬清鎧さし物鎧を持て馬よのり  
皆々を相手お立廻る此跡方二幕目の水間左近後鉢巻手輕  
の拵へにて母衣へ首を包しを脊負出て落てる首を拾て  
包ひ大勢を追散し彈右衛門イヤとの首も雜兵おられ取バ  
へもせぬ(犬清)勇との其首持て怪我せぬ中お歸れよ(彈)  
イヤく涉先途を見届ぬ内お歸せぬ(犬)イヤく夫と  
無益の事(彈)イヤめつたにの歸ぬくト此時又一下方  
鎧武者大勢出て(皆々)かやつ小田方討て取ト兩人へ蒐  
是方又立廻おあり彈右衛門の熊手おて犬清の加勢をする  
ト皆々を追て彈右衛門上手へはいる(犬)勇との長追ひ  
致されちト案事トト救やさんト(犬清)馬上おて行ふと  
する爰へ水間左京之助馬上おて好の鎧軍お勝し休よて

出て来り(左京)ヤアく左枝犬清殿見参あさん(犬)我名  
を呼い何者ぞト(左京)昔も聞し小田の臣イデ一ト勝負仕  
らん(犬)シテく姓名の(左京)某事の今川の家臣水間  
左京之助(犬)我の左枝犬清あり(兩人)然らば是よてイヤイ  
サト兩人互角の立廻有てト組打小成左京手を負トト左  
京を組敷(犬)イデ此上の貴殿の首級を(左京)ヤレ待よ元  
方貴殿へ進せ此首(犬)何と不審の仕打(左京)我 賢よ  
結し此札得と傍覽下されト是にく犬件の札を取て讀(犬)  
左枝犬清殿へ我首進上下者也ト不審の仕打心得難き貴殿  
の胸中(左京)如何も傍不審傍尤も我こそ傍身々妻の芳野  
が爲の實の兄(犬)扱の左近殿の長男なりしクト兩人仕打  
是方左京の我惣領も生し能師の業を嫌ひ何卒武士お  
らんと家出なし縁有て今川家へ有けしお父の小田家の扶  
助を受殊ヌ犬清殿の妹芳野と不義の科よ小田春長の勘  
氣をうけ此度の戦ひお討死の覺期と聞是ぞ幸ひ味方の  
大勢を頼て終小敗北主家の滅亡を見も如何と兼ての決心

何卒主君お先達て討死とい思し妹お繋る貴殿の初陣と  
て物事は犬清殿お我首進上り度と亂軍の中を駈廻爰で逢  
しも盡せぬ縁ト宜く有て我首取て手柄とあし歸參を致さ  
れよ(犬)義心と云も餘ゆりされ共妻の兄と知り何で首を  
討れよぞ手負たれと未淺傷是方領地へ引上て養生なし  
く時節を待れよ(左京)元方恩を受し氏基公に後んや早く  
首級を(犬)サア夫の(左)討すの自殺あさう(兩人)是よ  
てせひ無仕打(犬)然らば首級を受やさんト是方兩人名残り  
を惜み述懐の臺詞渡上るト、泣く左京の首を討爰へ以  
前の彈右出て来り(彈)左枝殿の(犬)勇殿で有たりト犬清  
の泣顔を見て何故貴殿の落涙召るぞ(犬)サア是のト思入  
(犬)只今そこ元の傍子息たる水間左京殿を討取たり(彈)  
何とト首を見て恟りする是方犬の以前の事を話愁の仕打  
彈右衛門の能義に依て討れしぞト愁嘆兩人有てト風の  
音おて雨車小成眠と爲て(犬)ヤ、今迄晴し晴天も俄に風  
雨吹起り(彈)早手と覺き雲立も小田家の勝利ト臺詞渡雨



の音よて道具廻る

大結田樂ヶ嶺の場本舞臺松の大樹下手流の波板所々よ松の立木雨頻と降る床の上る有りて爰へ以前の今川氏基の兜鎧大將の拵大わらひよて大勢を相手立廻り大勢を退散し鎧を突てホット一息つく(氏基)折も折どて敵方(天も力を添けるの俄の大雨最早絶体絶命成かト無念の仕打爰へ上下方武者大勢出て氏基へ懸る是方松を小船に取て宜敷立廻本雨を遣ひ氏基手負ある爰へ向ふ方以前の庵原大わらひよて出て来り我君是よムリ升たの(氏)チ、汝の庵原ト是方(春)の味方の名ある者の過半討死最早叶ぬ君の傍運然乍死の難し少も早く戰場を此儘留延給へ余君代て此場を引受やさんト云(氏)懸此場を落る共四方の敵の街されバ予も討死の覺期(春)然バ身共の死出の魁けト自害して落入氏基無念の仕打(氏)我初陣の其折方後を見せたる事も無ハ斯小勢なる小田代爲取を取し残念至極設落命爲よもせ冥府の鬼とあり恨を晴

さん思知ト無念の仕打有此時後黒を幕切て落すと桶狭間の遠見お成爰へ上下方郡新助香取小平太伺ひ川で双方方氏基へ鎧を突く是にて氏基の新助の左の足を切此内小平太氏基の足を突氏基爰て手負ありたぢくとある(氏)名も無匹夫が手よ懸り最期を遂る(小平)イ、ヤ匹夫非我の香取小平太あり(新)まつた郡新助秀經(氏)初岡崎よて我を狙し幸内が弟よ(新)奈も傍身を討んと狙ひ果すして死たる兄幸内イザ首級を(氏)ヤア汝等如きよ渡さんやト是よて立廻有て(氏)に(新)小平太)兩人組付爰へ上下方以前の大清二役此下東吉軍兵大勢付添出て(東)ヤレ早まる希しや氏基公此下東吉見参せん(氏)ヤわれの猿冠者(東吉)愚や氏基公我初陣の時手柄始に伊藤日向守が首級をわけしお君よ拾首あり逆用ぬ盲目愚將也と見限り小田家へ仕へ今日傍身を討取の本懐あり(犬)我も勘氣の傍託よ幸ひ成川戦ひ(智)傍運の末と斷念よ氏基始終無念の仕打(小)新イデ傍首をと云(東吉)假

おも駿遠三の大主成バ首級ハ漫りあわけ難し今香取郡が働さの互よをとらぬ第一の手柄まつた氏基公も郡幸内が最期と云兄へ盡せし新助へ傍首をお渡有(氏)イデや生害ト我手小刀を首へ當エイと聲をうけて後へ倒れる是にて首を上(新)兄の望も叶へバ(小)勝利を味方へ知らせの爲(犬)敵の勇氣をくぢくの勝鬨ト此鬨詞宜敷皆くへ渡り勝鬨ト向ふよて(大勢)エイ、チウト此模様宜敷上るり有て勇ましき鳴物よて幕

○第二番目序幕「今戸橋の場」本ふたい向ふ高き小山の張物石段松杉の立木上の方待乳山の普請小屋夜の道具爰よ仕出し三人雨舎りをしおから(三人)けふの角力ハ大そふお大入だつた又強く降て来ぬ内往ふくと替々上手へはいる向ふより黒鷲の弟子(三人)はふ冠り尻はしより一本差よて出て来り(三人)今札賣の咄しを聞バ唐犬始め男達けけふの角力の勝祝ひお巴屋ではれの酒もり其上幡隨院うら櫻川へまのしを贈つたとのをさしよだん出入の水

尾さまや近藤様が角力よ負たり大きを取辱と内の關取のお出入を止られ再び土俵へ上られぬけふの勝負その腹いせよ道お待受五郎藏めを殺し男をたてるも黒鷲との約束もふ見えさふものだト三人普請小屋へ忍ぶまた雨車お成向ふより櫻川一本差下駄あて命をさし跡より(出尻清兵衛)出て来り花道よて(櫻川)俄かの雨の此暗がりお橋場まで送つて下さるの氣の毒(清)イヤ是も親分の言付禮おね及ぬトふたいへ来れりも爰でよいうら清お返れトいふ清ハ始終臆病のこさしおて今戸橋場の寺の近所向たり薄氣味が悪いト震えおてド、堀で傘をうりて来やうト清下手へはいる跡よ(櫻)清兵衛殿のゑらひ臆病夫につけても今日の勝負運お叶つて黒鷲お勝た計で唐犬殿と巴屋で馳走よ成其上煙草入を貰ふたが先の相手の官太夫ハ旗本衆のいひき角力けふわしよ負たので近藤さまがさつ立腹さのどくさ事だト云ふ此時ふしんの小屋の内より(黒鷲)櫻川だお選りつたお(櫻)難おと思へハ黒鷲

り(黒)そきたを待てゐた(櫻)待てゐたとい用でも有てり  
(黒)オ、こなたの命が貰たい(櫻)あんとは是も黒鷲の力  
士の勝負の時の運士儀の遺恨で櫻川を殺したと言れてい  
人よ再び此顔が合されぬのも承知よてそきたを殺し首を  
持て蘇本衆へ詫をせねば男がたぬト云(櫻)そういふ事  
どの知ッてゐたがこつちも首を渡して花川戸の親方へ濟  
ぬうらとるから腕づくで勝負をしやうト是も兩人白刀を  
抜合し立廻る以前の弟子四人出て助太刀をし櫻川の三人  
を相手よ立廻り三人の弟子手を負す愛へ清兵衛返り見  
て悔りし此内櫻川の弟子二人をしとめ一人の手負ふて蔭  
へ逃る此内清弟子の死骸を敷りげへ入る兩人立廻り終に  
黒鷲を切倒しとめをさしホット清兵衛心付すかし見て  
(櫻)そこお居るの清兵衛殿(清)出ッ尻と震ぬる  
(櫻)早く此場を逃て呉(清)向ふへはいる(櫻)黒鷲の死  
骸を見て(櫻)後悔のこゝし是も今更言て返らぬ引よひ  
かれぬ士儀の勝負せけを遺恨よ待ぶせしわしを殺す

了簡と聞てこのつちも男づく後を見せる譯も行ねつひ  
よ手よ懸殺した互ひの此災難ト此後へ以前の弟子親ひ  
よつて(弟)師匠の敵ト切てうよるを櫻川立廻り切倒し身  
支度をして唐犬お貰ひしよバこ入がさ故悔りして(櫻)  
南無三大事のたばこ入をト邊りを探す愛へ上手(唐犬)  
巴屋の番傘をさし櫻川を案事出る下手近藤野守之助出  
て櫻川をすかし見て怪しいやつだといよ是より三人立廻  
りあつて櫻川が落せし煙草入の近藤の手へはいり月よす  
のして見て(近藤)若や今の(櫻)唐犬)エイト花道よて  
薬を打ッ(近藤)ハ刀の柄よて是を受向ふを透し見る此も  
やうよろしく幕  
○二幕目「勘水尾屋敷の場」愛よ水尾の家來二人角力場  
の世話役(二人)扣へ居て(家來)だいな早朝うら参ッたが  
殿さまへ何り願ひでもある(世話役)わたくし共が参り  
ましたの角力興行も係なる事ゆゑとぞ殿様にお目通  
りをしとふムり升(侍)殿様の夜が更れバ朝の四ッ頃でな

ければお目が覺ぬ夫迄お次で待てゐよト世話役の昨夜お  
抱への黒鷲が殺され升た(侍)かんと夫の大變打捨置れ  
ぬ故直と涉前へさうやふト此時奥より用人(黒澤)出て  
只今あれお承たまひれば黒鷲が切害されしとト是よ  
り用人の昨夜涉前お藏前の角力にて櫻川よ黒鷲が負た  
りとして近藤様よりお知らせゆる立腹夫故出入の差留る  
と以ての外の浮機嫌シテ一切害した者の手懸りでもあ  
つたり(世話役兩人)相手い何やう幡隨の子分のものト専  
らの取沙汰 黒澤 日ごろ不和なる町奴多分のれらが仕  
業であらふトこへ奥より近藤出て來る(黒澤)(近)憎く  
さい町奴長兵衛がさしづで白柄組の我々へ恥辱を與へん  
ト悔しきこなしレ、近藤の拾ひしたばこ入を出し(近藤)  
是ぞ昨夜今戸橋よて真暗がり故持主の知れざり銀ぐさ  
りお金物の牡丹の高彫一際目立好みの町奴が所持よ違ひ  
るし是が死がいの片わきよ捨てありし詮議の一ツ何で  
も幡隨めが仕業近藤思案の思入此仕返し町奴お泡を吹

せる工風グラウクんだ(黒)シテその傍工風(近藤)その工  
風の此たをこ入を証據とあし町奉行所へ訴へ出長兵衛め  
を牢舎させ夫よ荷擔の者ありと子分の奴まで愛目を見せ  
んと(兩人)よろしく道具廻る  
○橋場櫻川内の場愛よ五郎藏の母おまさ茶をいれてゐる  
この下よ家主全兵衛このはか合長屋の者居て茶をのみ(母)  
合長屋)さうして夕邊の人をろしを見つしやつたか(母)  
アモンゆふべ何處ぞお人殺しがムりましたり(家主)まだ  
お袋の知らぬト是よてゆふべ今戸橋で角力取の黒鷲と  
いふ者が殺され其又傍お其弟子が三人非業の死おやう  
(三人)こつちの關取の一ツ仲間今朝見舞よでも行しや  
つたの(母)それの大變事事でムり升た今朝五郎藏の早く  
寺参りよ参り升た故そんを話のまだ知るまい無聞たなら  
悔り致し升ふ(家主)イヤ夫よつけても五郎藏の親孝行嫁  
を貰ふたらお袋へ孝行が怠たるとて持ッ夫故う追々の出  
世角力ト誓詞有てドリヤもふいつべん殺された噂を聞て

来やうト家主合長家ついで下手へはいる跡(母)今の話し  
で昨夜黒鷲關が殺されたとの話し夫は付て苦勞よある  
の五郎藏がそより足をくぢいたと言て床よ着て何やら物  
案じ今朝寺参りお往と早く出てゆさしも昨日新觸の櫻川  
と黒鷲モ案事られた事じやト是方床の淨瑠璃よあり文  
句宜敷有て向ふ方櫻川足の痛む思入おて出て来り(櫻)と  
うしたものと胸よくツたく夕邊の事目と鼻の今戸橋殺  
した相手の五郎藏とお奉行所へ訴へ出やうと門口へ来り  
氣をうへて母じや人今歸り升たト内へはいり宜敷住ふ兩  
人せりふあつて(母)コリヤ悴そなたの戻りをまら聞て見  
たい事がある(櫻)敗たまつたお袋の尋ねやう聞たいとい  
どんち事(母)ゆふべうらのそなたの顔色氣おある事でも  
あるからい何も隠す事いさい唐犬親方と巴屋くら返つた  
途中で何事もあつたの(櫻)ヤトぎツくりこさし此時向  
ふより伊勢清の娘おはを走り出て内へ欠込む(櫻)ヤあさ  
たの磯前のお嬢さまト胸り思入母に見てそんなら日頃涉

ひいさよある伊勢清さまのお娘子うそふしてお供もお連  
あされずとこへお出さされ升た(娘)今朝觀音様へ参詣よ  
来たがコレ五郎藏そなたは頼みがあるト娘櫻川よ見惚て  
ゐる櫻川の折が悪いア、コレお嬢さまのふもやたでい  
ふり升ぬかト目せせで思入れ(娘)是非ともおそなたのお  
うみさんおして下さんせト恥のしきこさし(母)ソリヤア  
どふいふ譯でコリヤ悴そちのとふくら(櫻)イヤ、何で  
私しガト迷惑のこさし是より母の大事お巨那場の子  
意見やして早くお内へお送りやせといふ(娘)イエ、望  
みガ叶いぬバ死ぬ氣で此家へ参つたから再び内へ返り  
升ぬ(母)胸りこなし娘の親のゆるさぬいたづらと思へ  
思ひ切れぬバどふぞ女房よしてくれト母へ手を合せ頼む  
此件よろしく櫻川の今死ぬる身といふこなし娘の意見を  
さかず叶へてくれぬバ死ぬといふ櫻川當惑のこさし(櫻)  
ア、困つたものトやト上るりあつて向ふ方下女(お民)出  
てお嬢様よの櫻川さんの内お違ひいト案事て内へはい

る娘を見てオ、お嬢さま愛ふお出さされ升たかト嬉し  
思入是方娘お返れとすしめ夫婦よあられ共せめてお傍  
よ置てト泣伏す是を聞付幕あきの家主出て見れと立派  
大家の娘幸ひ獨身の五郎藏との女房よ貰ひあさい此家  
主ガ嫁姑としてゆげやうトせりふ液り否ぐるを引立お民  
付て(娘)下手へはいる跡母のこさし有て(母)コリヤ悴ゆ  
ふべの人殺し定めて聞たで有んが殺されたの黒鷲關殊に  
きのふの取組のそなたと黒鷲土佐の勝を取たと聞しが其  
幸先の人殺しそなたの知つた事でのああらふがとやう  
氣よ懸る(櫻)イヤ心配さつしやり升あま潔白いふ(母)  
夫で心が済ました夫おればそなたお見せる物がある(櫻)  
私お見せる物とい(母)血の付た着物を出し(母)殺した覺  
えのさい物おあんで着物は血がついて居る(櫻)ヤトギツ  
クリ櫻川氣を替(櫻)イヤ、着物は血の付たのゆふべ今  
戸を暗がりて通つた時は黒鷲が死がいお爪づき付たので  
ムり升ふト愛へ合長家駈て出(合長家)コレ息子殿返られ

たうゆふべの人殺しを今傍観が居るところを様子と聞  
バ黒鷲を殺した奴の人も知つた花川戸の二子分唐犬權兵  
衛だど目印をつけて詮議最中ト是を聞胸りあし(櫻)ヤチ  
夫あ何ぞ證據でも有ての事う(合)儲りお事聞ませぬ  
ガ死骸の傍お落つた煙草入が証據物よあつたとやら  
(櫻)エ、そんなら落したたばこ入がトこさし合長屋下手  
(は)はいる跡櫻川胸苦しき思入あつて足の痛みを堪え花道  
へ行ふとする(母)留(母)コリヤ悴さつさうのへて何處へゆく  
(櫻)サア日頃ひいさおなる唐犬殿知ぬ顔じや居られ升ぬ  
櫻川花道へゆりんとするを母お牧とめて唐犬殿の災難を  
案事て往の尤もなれを相手の知つた仲間の黒鷲返つて行  
たらそなたに疑ひが懸らん夫程思ふから此母が終一ト走  
りいつて様子を見て来やうト櫻川そんならお前苦勞を  
から橋隨院のお家まで往て様子を見て来て下され(牧)オ  
、合點ヤト身支度をして門口へ出悴を案事する必らず外  
へ出ぬが能ぞト向ふ(は)はいる跡櫻川見送る(櫻)是が此世

の別れなるう母ぢや人死して下されト櫻是方宜敷愁歎有  
て硯箱を出しせめて一筆書殘さんト櫻川書置をのく向ふ  
長兵衛跡を消兵衛供をして出て来り花道ふて(長兵衛)  
きのふり出入屋敷のお國行で神奈川迄送りお行た留守よ  
今戸橋で人殺し相手の黒鷲殺したの櫻川は遠ひないの  
(清)角力も勝た祝ひト首て巴屋のら歸りのけ私を送ッて  
いつた道黒鷲が待伏して切て懸ッたを五郎藏がたつた一  
人で四人を相手お見事先を仕留升た(長)シテ又唐犬殺  
したとお召捕けあつた譯(清)夫いさのふ巴屋で權兵衛  
兄いッ櫻川へ勝た褒美は煙草入を遺たのを其晩をこで落  
したゆゑ夫が證據あつた(長)その煙草入が近藤の手よ  
はいつたゆゑ腰を押召捕したも日頃の遺恨櫻川を尋て内  
の様子を見様ト兩人門口を叩き(櫻)南無三人が来たやう  
すト刀をぬき腹へ突立苦しむ門口ふて是を聞(長)消兵衛  
大とらゝある聲がとる(清)オイお袋くト呼と聲せぬ故  
長兵衛格子を破り内へ這入櫻川の切腹を見て(長)コリヤ

五郎藏腹を切たか(清)コリヤこそ事だト胸りする此内櫻  
川の苦しむ長兵衛の介抱して以前の書置を取上(長)何書  
置の事ト是方書置を讀此文言の終は黒鷲と弟子三人まで  
討はたしや然るも其日唐犬殿を下すつたよばこ入を拾  
はれは召捕どの事承まのり驚入直も訴へ出浮成敗を  
受んと存ひへ共刑罪のあさましき体母が見ひのよさぞや  
歎きをまじやべくと母の前を兼ひ問事の次第を書殘し切  
腹おし相果すは跡お残り母の身の上何とぞ浮懸すし  
と讀終る櫻川苦痛の体お(櫻)其書置よて權兵衛のよ  
無罪の難を早く通れて下さる様訴へて下さりませ又跡よ  
殘つた母親がさぞ歎せせうと夫が何れ黄泉の障り(長)オ  
櫻川跡も殘つた母親の此長兵衛が引受て一生涯世話を  
するらら必ず家事苦痛を忘れ早く冥土へ行が能(櫻)夫  
もて思ひ置事なし只一ト目母トや人よ息有内も逢度も  
だ(長)さうしてお袋(清)留守と見え升ト此件宜敷ある  
向ふか母先よ家主いせ清の娘お花を連れて出て来り門口の



毀れて居るを見てコリヤ門口が此様破れてゐる氣よ  
懸るト首く内へはいる長兵衛見て(長)オ、お袋歸ッたり  
(牧)あちたの親方様さうして悴が何とぞしましたり(長)  
オ、腹を切て死んだ(母)エ、ト胸りするお花も胸りして  
兩人ウツト襦を起し苦しむを兩人を抱起し介抱する此様  
様宜敷息をふさぐへし(牧)コレ親分様悴の何で腹を切ま  
した(花)はいさい事でムリ升ト櫻川へ縋り歎く(櫻)オ、  
母トや人待てゐた死ぬ譯の親分くら跡で聞て下され(牧)  
あら若や人殺しの(長)ア、コレ其譯の跡でゆつくりマア  
そんな差當ッて此娘子のさういふ譯で爰へ来たのだ(空)其  
譯の家主から断ませらト是方此娘子の藏前のいせ清の娘  
子で兼て最貧の櫻川を懸難ひ先刻爰へ来あすつたを物堅  
い五郎藏故斷つて歸したを私が中裁で親涉へ懸合得心さ  
せて五郎藏殿と目出度婚禮をさせやうと運て来たが肝心  
の體股がお陀佛といコリヤ當が外れた(花)たどへ櫻川さ  
んが死んだ迎私しも直も跡のら行未來で夫婦お成升る(

長)ア、ユレ若い身そらで死ぬの、悪い此長兵衛が媒妁  
 で今五郎藏と盃させ未來の縁を結ばせやうらら必ず共  
 無分別な心を出して親は、苦勞掛あさるな(牧)そんな  
 ら悴ど(櫻)是も定まる因縁づく必ず親へ不幸事をお  
 さるあよ(長)幸ひ手向の茶碗の水ト宜敷皆々へ盃詞渡り  
 (長)(櫻)を介抱して(花)と盃をさせる此内(櫻)のあつこ  
 りと思入有て合掌する(牧)花)の取付敷く本釣鐘を打こ  
 み上るり「わはれ果敢なくト皆々愁のこあし宜敷幕  
 ○大詰(花)川戸幡隨内の場、本ふたい向ふ地袋戸棚床の間  
 是へ三社大権現の掛物をうけ神酒を備へ都て長兵衛内  
 の道具こよ(相中)子分あて此間だ親分のひいさ角力櫻  
 川が今戸橋で黒鷲と喧嘩として殺したといふ騒動トこの  
 筋のせりふよろしくある向うふより長兵衛女房お時櫻川  
 の母お牧跡より出尻清兵衛長松をおふひ供をして出て來  
 り花道ふてけふの櫻川の初七日寺参りおいつたといふせ  
 りふ有て内へといる子分みさく〜おうみさんお歸りなさ

いまし(時)留守は誰も來るんだ(子分)極樂十三う遊び  
 お來て奥で親分とはあしてのま(牧)けふの悴の初七日  
 のあかいそがしいよ寺参りをあうみさんぐして下さい升  
 たり無草葉のりげで悴が悦こんで居りませうトはるりと  
 思入これより長松子分みさく〜といろ〜せりふわたり  
 向ふより水尾の用人同主膳出て門口へさたり(中間)頼ま  
 う〜ト是もて子分出てさちらうらお出あされました(中)  
 中)水尾の屋敷から参った(子)何水尾くら來たこいつの  
 只事じやねへト立騒ぐ奥方十三出て白柄組の頭分水尾の  
 屋敷のら來と云い借らぬ喧嘩お違へね(子分)何でも其  
 奴を敲き擲れト(十)初め鉢巻をさして立懸るを留て(時)  
 是はしたり何のお使の知ぬ静にしない(牧)マア〜皆  
 さん下ふお出あされ升(十)何も騒ぐわけぢやアねへが水  
 尾の屋敷から押て來たから(子)こつちも喧嘩を買ふやア  
 あらねへト立懸りワヤ〜いふ(時)何もけんくわあ來た  
 といふ騒いでいあるまいたりお使といふ事ゆゑ静うあし

たがよいトいふ是あて十三鉢巻ととり腰をのめ門口を  
 開け(十)水尾様のお使ひのあきたでムり升の(主)いふお  
 も拙者でムる(十)マアお通りあされ升(主)然らばゆるし  
 やれト上手へ住ふ(時)あはさつして(時)大長兵衛をお尋  
 ねあさるわあた様(主)拙者の水尾が用役主膳とアもの  
 チト長兵衛殿は密々お頼み入度子細あれバ滞在宿あらバ  
 面會して下されトいふ(清)滞在宿とおつしやるの山  
 宿の間邊でムり升(十)エ、だまつてゐる(時)何の用  
 か存じ升ぬが私し長兵衛の家内のもつとぞ用をお  
 聞せあすつて下され升(主)滞家内とわれ頼みたき一  
 義をお話しやたけれどチト内密の事主長兵衛との面會  
 がしたふムる(時)夫でい奥へト立ふとぞ此時奥あて水  
 尾様の用とあらバ只今お目も懸り升(主)奥より長兵衛  
 出て來る(主)見てそりやあ手前が名の高き幡隨長兵衛と  
 のでムる(長)へい本姓は塚本長兵衛故あつて私しを權  
 隨長兵衛とア升るトあはさつわつて(長)マア私しへ内密

は用とあつる(主)其子細の他聞の憚りトこあし(長)察  
 して手前達の奥へいつてお茶でも持て持つて來(子)  
 夫ぢやア長松さんかんふしあト(お時)(牧)(十三)竹松子  
 分皆々奥へといる跡(皆)もの遠ざけ升れた密々の  
 用と(主)餘儀ない事で長兵衛殿(拙者)が頼みお聞届  
 け下されト是(主)其頼みとア拙者主人十郎左衛門  
 生れ立短慮として荒しし氣質ゆゑ先代の十郎左衛門  
 深く是れを歎き病死の折も拙者を招き奥々も遺言に代  
 して異見せよと涙ながらの頼みよ日頃酒の振舞を再  
 三異見あすとも彌々痛べき強くして終つ上のお咎  
 うけ近頃貴殿と白柄組の櫻川と黒鷲が角力の事お異越の  
 思とのく、本業貴殿は遺恨を返さんと密々貴殿を邸へ呼  
 寄刃傷及ふ謀言必ずあすお水尾家方迎が参ると有共  
 其時他行と偏り邸へお出これあき時、必ず無事お兩家  
 の納り若又お出る時、水尾の家にお上をお祭あるは是  
 必定愛を思ひて此主膳が貴殿へ此由頼み入る必ずお出下

さるも頼む(長)いかあると存じ升たが主人様を  
 思し召町人風情へ其の頼み感心致してムリ升る(主)男と  
 見懸今のお頼み此上の長兵衛殿此はとぼりのさめる内日  
 光山江の島へ暫時旅行おされてゆくださるまい(長)  
 主人のお家を大切と恥を忍んでお出されし事ゆゑ聞て  
 わげ度事おがら是れどうも堪れませぬ(主)聞れぬと音る  
 したは是方長兵衛の凡そ天下は八万騎威勢を振ふお旗本  
 其内おも白柄組それを相手の日頃の喧嘩喧嘩も相手を  
 まわがり旅へ送たといわれて折角磨いた私々名折是バ  
 かりにお断りや升るべきつばりいふ(主)汚尤なる仰せな  
 れと時宜お由ての家のお願何卒無事を思れてそこを聞届  
 けて下さるまい(主)再三頼むこゝろし宜敷長兵衛も感  
 心おし(長)旅へ行のいどうあつても承知の出来ぬがわす  
 が日おも若お迎ひが来て私しがお屋敷へ上りましても願  
 ぎまならず縁便お只何事も胸は堪へおあたの忠義を無に  
 せぬやう取計らひますから夫にお案事おされすな(主)

遠がの當時の適ばれ男拙者たのみを聞わけて(長)た  
 何ごとも無事を思ひ(主)そりや聞届け下さるうと感心  
 のこもしあつて(主)左様ござらば長兵衛殿拙者も最早お  
 暇やし(長)モウお歸りでもります(主)是を汚縁又其  
 内(長)ゆつくりお目よ(兩人)掛りませう(主)中間つ  
 て向ふへ遣入奥方小分皆付て出て(十)使ひお來たり正  
 直さうな人なれと名におふ先が水尾ゆゑ(子)若もの事  
 もありやアしねへると陰で聞てゐましたが(十)夫じやア  
 水尾の屋敷から迎が来るよ違へぬ(長)元より遺恨の重  
 かる上よ此間の角力うら白柄組と町奴の間お不和の風が  
 起りてうごもめわふ荒月故血の雨降して大荒があけりや  
 アどうで形附めへ早手の迎ひ待がいとこおし是方長兵  
 衛のけふの無罪の疑ひで牢舎よ成た唐犬が赦免あつて  
 出るよ云ふ差紙付たぞ知らせ手前達の汚番所まで早く  
 迎ひお行かいと此時奥方長松を連出てばうも汚番所へ  
 一所お行たい(清)そんなら一所お連て行ふ(時)人

込台處だのら怪我をせぬやう氣を付けてくれ(清)そんな  
 ら親分(十)ドレ迎ひよ出掛やうと清長松を脊負ひ十三  
 子分付て向ふへ遣入跡(牧)出て俯向て泣伏す(長)コレお  
 袋おんで泣のだ(牧)此汚苦勞を無升も元いと云ハ悴故濟  
 さい事でムリ升ト愁の思入(長)白柄組と町奴の櫻川の遺  
 恨だと思ておやう元の起り子分の奴らが吉原で喧嘩を  
 したが遺恨の根ざし決してそんな心配りせぬが能(時)便  
 お思ふ子よ先達れ無や必細のら人生涯私ガ世話をするり  
 ら心丈夫お思てお出(長)弱い者を助るが男達の性根故救  
 った事もあるけれど其代よ強い者おら壁へ大名旗本で  
 も跡へ引ねへ私かたましひ夫故おすとも知ねへ體(時)エ  
 ト聞答める(長)散時おるのガ花だトこおし向ふ方前幕の  
 黒澤庄九郎中間付て出て來り(中)頼もふ(時)ハイお  
 ちらからお出され升た(中)手前水尾十郎左衛門お參  
 た(時)エ水尾様うらト驚く(牧)若や夫でハト云ふを押へ  
 (長)何の汚用お聞のせ下さいト是よて内へ遣入(黒)拙

者ハ用人黒澤庄九郎と云者主人十郎左衛門貴殿のお名の  
 高さを慕ひ是非面會を致したいお付幸ひ庭前の藤が盛ゆ  
 る鹿酒一獻けんじたく何卒参入來下され度ト述る(長)是  
 らく汚歴々の水尾様お町人風情の私しを汚招待下さる  
 とい有難ふムリ升(黒)シテ汚入來下さり升り(長)冥加よ  
 わまるお招き故後刻参るでムリ升ムト云を傍うら(時)ア  
 、コレけふの退ぬ事があると終お断りを(長)エ、いらざ  
 る口出(黒)左様ムらばお待せト黒澤甘くいつたと向へ  
 遣入跡お時こおし有て(時)コレお前水尾の屋敷へ今行  
 と云しやんしたお(長)行ねば相手お白柄組故恐て來ねへ  
 と云れて打角磨た己が名折夫お早く着物を出せ(時)さ  
 う言出たら利ねおまへせめて唐犬權兵衛殿が歸った上で  
 何かの相談トお牧共々此筋宜敷留るを聞ず(長)エ、ぐす  
 くせずと早く出せト女房を叱るお牧の私の子分のお人  
 を呼で参りませうト向へ遣入お時泣々奥へ遣入(長)思  
 入有つてこのおひだのら吉原で若いやつらが喧嘩をして

白柄組の恥辱を與へ夫々遺恨で長兵衛を以て命を取ると  
 簡それを知りつゝ屋敷へ行もかまらず男と立られし此身  
 の不運然し唐犬始として多くの子分が見ても居めへぐど  
 うぞ無難で已一人死んで納まる工風のねへ夫又付ても  
 女房や情の歎きが不便だかアト此筋上るりにて愁のこき  
 し奥方羽織袴を持って出長兵衛見て残らず揃へて持て来り  
 (時)一世の晴故新しひの揃て持て来れど羽織の染て  
 仕立た計り目出度事の有た時着初と思し甲斐もあけけふ  
 の晴着あるといふの悲ひ事でもんすト(時)宜敷愁のこ  
 きし長兵衛態と叱(長)エ、延喜でもねへ泣き此年まで片  
 商賣の喧嘩をしたがいつも町人同士けふの相手天下の  
 旗本命を取るとも思ひ残す事いかに愛度はが噴着だト  
 こきし是より上るり文句有てお時涙あがら長兵衛お着物  
 をささせる此くだん宜敷此内向ふより三立目の唐犬補兵衛  
 駈来り行ふとする長兵衛を留オ、兄貴まだ内にムつたの  
 (長)そきたり權兵衛(時)ロイ所へ来てくださんしたト悦

ふ是より唐犬の今途中で委細の話の櫻川のお袋から聞た  
 が兄貴お前の遣られねへ(長)何遣れぬとト是にて唐犬  
 こきし有て唐犬戦争で言ひ兄貴も相手の水尾も兩大將  
 外お子分のあいでのあし兄貴も代て己がゆき勝の負るの  
 した上で大將のお前が出て討死するとも遅くあるめへ  
 夫れ故此の唐犬を遣て吳(長)日頃の好身おれをうをひ  
 水尾の屋敷へ往と云ひ添けあいが夫の不承知己が死なら  
 骨を拾ひ跡の事頼むといふ唐犬の櫻川も遣た煙草入りら  
 人殺しの罪をうけ獄屋の責も天道様のお蔭で終お疑はれ  
 再び娑婆へ出た體是非共己を遣て吳ト唐犬思入有ていふ  
 と長兵衛は是非自身お行ねバ男が立ぬト争つてゐる此  
 時向方以前の清兵衛長松を背負十三の子分四人櫻川母お  
 牧皆々出て内の様子ささ内へはいり(十)様子外で聞  
 たが唐犬兄貴を遣るより高が相手の小ッ旗本此十三が  
 獨で澤山是非とも己を遣てくだせト是又付て子分四人  
 平常の恩を返す此時命を的お水尾の屋敷へ遣て吳ト皆

皆長兵衛をうばふの感心のこなし長松頑は無こきしめて  
 (松)此春年始親父さんの代出たうらら屋敷へも坊が  
 代お行ませう清オ、能言た〜山椒の小粒でもヒリ、  
 と辛(長)エ、やうましし譬へ誰がいつたとして行ふと覺  
 期し上り誰も頼まぬト断然いふ(唐)言だして聞ね  
 へ兄貴ト是よりお時長松を遣ひ此子がお前可愛くあいう  
 是が一世の別とい何たる因果長松が不便から思ひ止て吳  
 ト上るりよて宜敷留る(清)も泣いだし(清)此ッ尻も親  
 分のおかげで町奴の敷いり臆病ながら居れど今  
 別れた其跡力少さい此清兵衛死ぬのいどうを待てくだ  
 され(唐)是程云のら聞分て(皆々)思ひ止てくだせト此  
 内長松長兵衛の袖お縫り宜敷留る長兵衛も涙を隠し宜敷  
 別れを借みせつゝあさこきしめて(長)唐犬始め子分の者の  
 巴をうばつて呉るのい決して仇に思ひねへト是方白  
 柄組にひけを取ての幡隨々恥辱をうりてかく折角知られ  
 た江戸中の町奴の名折とされバ仲間お代つて命を捨名を

後世に残す所在を聞分さうぞ遣てくれト宜敷く愁ひあ  
 つて氣をかへ手めへ達り四ッ迄も早桶をもつて迎ひよ來  
 てくれト行ふとするを皆々留る是を振拂ひ思ひ切て外  
 へ出る皆々愁ひのこきし此もやう宜敷道具廻る  
 ○廻町水尾屋敷の場都て客殿の道具こゝも水尾の家來扣  
 へ居て皆々黒澤氏がお使ひより歸られ直さま跡方長兵  
 衛が参るとの事のれ元寺澤家の浪人ゆる武藝達者と聞  
 かよぶが度々後前のお仲間へ恥を與へる遺恨おより黒澤  
 を殺した事い落ちりほりし煙草入を證據とあして解死人  
 お立牢舎したるお櫻川めが切腹あして書置よて終無  
 罪と赦免にあり思ひしことも手違ひおいよ〜長兵衛を  
 呼よせて町奴の杖を斷て葉を枯せ後前のおぼしめしト此  
 筋のせりふ渡る爰へ近習走り出て(近習)只今黒澤さま花  
 川戸の幡隨長兵衛を同道あし只今是れへまわり升す(皆  
 々)ソリヤ大膽おもたやひとりまわりしとトあさかれし  
 思入向ふよりいせん黒澤先案内して長兵衛袴羽織よ

て出て来り正面水尾十郎左衛門出て長いせりふゆつて此の後ハ互ハ水魚の交はり頼み入るト大盃を長兵衛へさす(近)イヤ何長兵衛とら元寺澤家仕官の身でありしとの噂能ゆる鷹爪を隠そと幸以此の場の一興黒澤と劍術の試合を致して見せろト云長兵衛の宜敷辭退するを聞ずイヤと立懸り長兵衛へエイと不意を討懸る長兵衛餘儀なく黒澤を打据る(近)此の上の進藤が相手と致さんト立ち上る長兵衛また是非なく相手とし立廻りゆりてイヤ長兵衛の透のゐるを見通す思入れ(近)驚き入たる長兵衛が手の内(長)イヤと遠く及べぬ私腕さへ恐入り升た水尾 盃と長兵衛へさす黒澤酌をして態と酒をこぼし長兵衛の膝を濡そ是を沙よせ湯へ這入と云ふゆゑ是非なく(長)左様なれば湯殿へト是れよて腰元二人出て案内して長兵衛下手へ這入跡水尾近藤傍りを伺ひ顔見合せ莞爾と思入れて(水)兼て遺恨の町奴わざと懸意を結ばんと近しきやうと偽はりて黒澤に付酒をこぼさ

せ衣服を脱せ風呂へ遣りしも長兵衛が身内寸鐵のあざを伺ひうれを討とる我計略(近)万事首尾能く参つたが彼れめの餘程の手者なれば猶此上も油断なく風呂場で不意に討とる手段(水)もし手は餘らば大身鎧を討留んハテ心地よしト兩人思入此いせんより用人水尾主膳様子をさし居て宜しく意見をいふト水尾のいらぬ諫言聞耳ありと言放と(用)是非及べぬト差添を振腹へ突立る(近)こりや主膳殿に早まつた事故したき(用)是も忠義を思ふ故ト苦痛の思入水尾の是も目も懸す(水)世もたわけさ奴だちアト用人を尻目懸る用人の無念のこさし此模様宜敷道具廻る

○同舞臺向ふ箱風呂折廻の板羽目都て風呂場の道具下手か以前の腰元案内して澤瀉の摸様の浴衣を出す是よて長若物を脱件の浴衣あかり手拭と持湯へ這入ふとするこのとたん左右よりバラと諸士四人出て長へ組付長扱こそと云こさし有て四人を相手よ柔術の立廻り見事よ投退

又掛るを立廻る黒も刀をぬき懸るを小桶の湯を浴せト、(黒)を當ウント倒れる爰へ上手より十郎左衛門襷掛にて鎧を持出て長兵衛と顔見合せ兩人氣味合のこなし(水)是迄數度の喧嘩方白柄組と町奴の互ひは敵同士よて遺恨お思ひ居つたる所能くも我家來を手込めとさし無禮を働く素町人汝の命の賞ひしぞト(長)覺期のこさしよて長兵衛いのよも命の差出物に望み通りわけ升り兄弟分や子分の者が留るも聞ず只一人爰の屋敷へ出て來たも死ぬを承知の幡隨長兵衛ト此の筋の要詞よろしく有つてサアすつぱりと突ッせへ(水)返が以前が武家出だけよい覺悟殺すの惜い者さくら日頃の遺恨は町奴の根を斷て葉を枯す其の手始めの某々家重代の百足丸トせりふ有つて十萬億土道を急いで早くゆけ(長)オ、先へ行共一ト筋道死出の山籠こせへさせそきたの來るのを待てるから早く己を殺さつせへ(水)見事はあて(長)サア何所くらでも突ッせへト上る有り(長)胸を出し爰くら突といふ水尾のいら

ツて鎧と突のける是れより兩人目ざまし立廻りあり水尾危ふさあし爰へ以前の野守の助も立にて出て(長)の後ろか一太刀切下る是よて血紅あかり兩人を相手よ立廻り(長)深手よ弱りせうとある(水尾)付入て突留(水尾)モウ叶のぬぞ幡隨長兵衛(長)死ぬ元覺期あれと不覺を取りしが残念至極(水尾)ト息の根を止めてくれうト鎧を取直し長へ止めを刺さうとするこの時近習一人走り出(侍)ハッヤ上ます(水)誰ぞ來たり(侍)ハッ幡隨の子分れも早桶をもつて迎ひとやし参り升た(水)ナ早桶をもつて來たとか門前お扣へさせよ(侍)ハットはい(近)迎ひのものが早桶をもつて來たとい能覺期(水)敵ながらも遣ばれたト此内(長)苦痛のこさしめて(長)早く止めをささねへか(水)ム、殺すのをしさと鎧を突こさしものじやなアト突兼る思入(長)のうつとりとなりしをさつと目を開く(近)是れを見てきよッとせし思入此のもやう宜敷幕

(畢)



大切本舞臺一面三浦屋の表掛都て吉原仲の町の体すが  
 きよて幕明くと地廻のひやらし出てきたり暖簾口か白玉  
 (福助)やりて禿附添出て来り向より白酒賣(家橋)出て白  
 酒の云立てあるト河東節淨るりよて秀調源之助のはる田  
 之助紫若三浦屋の傾城にて新造禿附て舞臺へ来る直と賑  
 やかき唄ふ成り揚卷の(高助)新造禿若者附添出て来り(一  
 國太郎)滿江ふわふ事有て淨るりふ成り揚幕も意久の(芝  
 翫)子分の八百藏(團八)鏡次郎喜智六附て舞臺へ来る  
 揚卷の意久ふわいとづりしを云ふ白玉とりあして兩人の

れん口へは入淨るりよ成吉例の拵へよて(團十郎)の助六  
 花道か出振有て舞臺へ来る(海老藏)の門兵衛と(仲藏)の  
 福山ののつぎとのわらしみか門兵衛と仙平の(左團治)助  
 六との立廻りか意久皆々のれん口へは入こよへ白酒賣出  
 て助六と同様か侍通人若衆あどわ一々股をくいらせる  
 笑しみ有こよへ滿江揚卷出て助六も意けんする事有てト  
 い滿江白酒賣ハ向へは入る奥も意久出て来り助六ハ本名  
 曾我の時致と名乗意久ハ伊賀平内左衛門と名乗ト友切  
 丸の刀を取戻し本望をとぐる迄めて目出度打出し

明治十七年五月廿一日御届

(定價金八錢)

日本橋區願轍町一丁目  
 四番地平民

編輯兼出版人

齊藤長入

京橋區築地二丁目廿九番地

賣捌人

中村重次郎